

「自分が過去に積んだカルマ（業）の結果です」。チベット民族の古老が淡々と語った。古老は元僧侶。中国政府によって囚われの身となり、激しい拷問を受けた。手足を折られ、膝や指に釘を打ち込まれ、吊されて打ちめされたという。

チベットの民族の今を描いた映画『ルンタ』。古老の言葉はそのワンシーンだ。監督はドキュメンタリー映画を手がけてきた池谷薫さん。「人間の尊厳とは何か」を追い求め、この作品を撮ったという。

チベットに深く関わる中原一博さんの目を通して、物語は進んでいく。中原さんは中国からの圧制からインドのダムラサラに逃れたチベット亡命政府の寺院や庁舎、学校などの設計を手がけ、今もそこで暮らしながら、チベットの人々の支援を続けている。

中国は一九四九年に、チベットに侵攻し、支配下に置いた。領土を拡大し、チベットの山々を源流とした河川に水源を確保した。チベットの寺院の破壊や、僧侶の虐殺、拷問など弾圧が続き、チベット仏教の最高指導者だったダライ・ラマ一四世は一九五九年にインドへ亡命。一〇万人以上の人々がチベットを逃れた。二〇〇八年の北京オリンピック前にあつたチベットの独立を求め、大規模なデモを中国が封じ込め、約二二〇〇人が死亡。それを機に、抗議する焼身

## 非暴力の彼方

自殺が相次いでいる。その数は現在で約一五〇人に上る。

チベットの人々は輪廻転生を信じて生きている。動物は食べるための殺生だけにとどめ、ハエを殺すことさえ忌避する。渡辺監督は昨年一月、東京での上映の後、「誰も傷つけずに、チベット民族のためになにかをしようと考え、『焼身自殺』に行きつく」と語った。やむにやまれずチベットの今を伝えるために若者たちが身をもって訴えているのだ。

想像を絶するような拷問を受けてもなお自らのカルマのためだと語り、自らの人生を受け止める古老。温和な表情で淡々と拷問の様子に、言葉では言い表せない感情がこみ上げてきた。

◇ ◇

フランスの新聞社「シャルリー・エブド」が「イスラム国」(IS)のメンバーに襲撃されてから一年が過ぎた。欧米はISへの攻撃を強めているが、テロはなくなるどころか、激化する一方だ。昨年一月にフランス・パリの劇場などが襲われた同時多発テロが起きた。今年一月一日にはインドネシアのジャカルタでもあった。

とりわけ、テロの発信地でもあるシリアは、内戦により数多くの人たちが犠牲となつている。シリア人権監視団(英国)によると、二〇一五年の一年間に内戦で死亡

したのは五万五二一九人に上った。一日一五〇人以上が犠牲となつている計算だ。うち子どもは二五七四人。行方不明者もあり、実際の死者はさらに多いとみられる。反体制運動が激化した二〇一一年三月以降では、累計二六万七五八人に達するという。シリアでは「死」は常に隣り合わせにあるのだ。

戦後七〇年を経過し、世界は再び戦争への道を歩みつつあるように見える。日本も例外ではない。覇権主義を強める中国に対抗するように、日本は、憲法の解釈変更による集団的自衛権の容認と、それに伴う安全保障関連法を強行採決した。力と力の対決、それが人と人の殺し合いに戦争へとかき立てかねない。

映画の題名の「ルンタ」とは、チベット語で「馬の風」という意味だ。チベットの峠や屋上には、ルンタの五色の旗が掲げられていることが多いという。ルンタが風に乗って空を駆けて仏教の教えを広め、願いを天に届けてくれると信じているからだ。

チベットの人々の非業な死がなくなることを願いたい。同時に、我々が今こそチベットに学ぶ必要があるとの思いを強くしている。自爆テロが反撃を生み、さらに自爆テロが起きる。こうした「負のサイクル」をどう止めるのか。そこそが身を賭してまでして訴えたチベットの若者たちへの弔いとなる。

ハ洋V